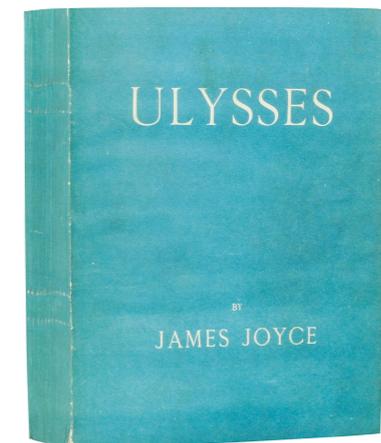


2022年の『ユリシーズ』一ステイターヴンズの読書会 第6回「ハーデス」(2020.6.28)

【読書会にあたってのお願い】

- ・ 13:00から13:25まではZoom操作の練習時間とします。音声や映像、Zoom機能に関連して試してみたいことがあれば、ホストにお伝え下さい。
- ・ 途中参加・途中退出OKです。
- ・ Zoomに接続できなくなるなどのトラブルが生じた場合、南谷のtwitterアカウントのDMか、workshop.stephens@gmail.comまでご連絡下さい。
- ・ 画面のスクリーン・ショット撮影について
- ・ 読書会中、音声環境をよくするため、ホスト側で皆様の音声をミュートにさせていただきます。



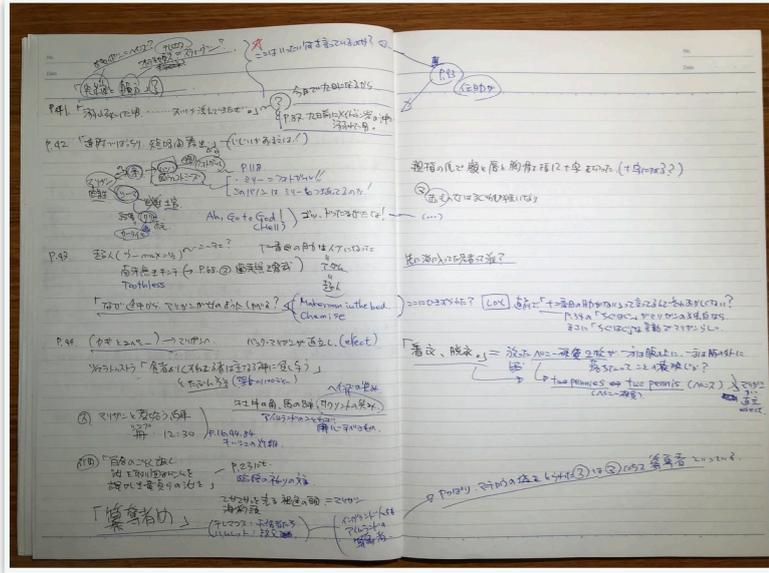
第6挿話 Hades

- 13:00-13:30 準備：Zoomの練習・操作案内
- 13:30-13:40 挨拶
- 13:40-14:40 第1部：主催者トーク
- 14:40-15:00 休憩
- 15:00-16:00 第2部：第6挿話の「言葉の地図」作成／ディスカッション
- 16:00-16:10 休憩
- 16:10-17:10 第3部：第6挿話の「テーマパネル」作成
- 17:10-17:30 挨拶・次回について
- 17:30～ オンライン懇親会

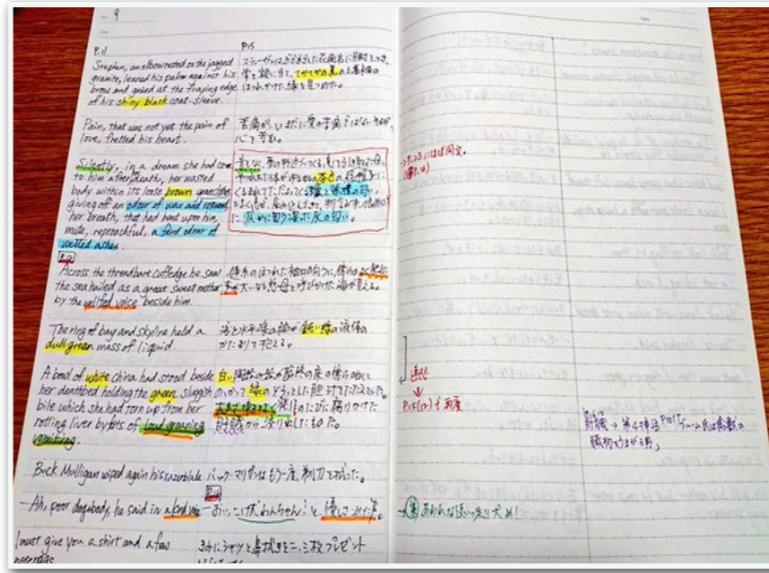
『2022年のユリシーズ』読書会予定表

第1回 2019年6月16日	第4挿話 カリュプソー	Book II. Odyssey	initial style
第2回 2019年8月25日	第1挿話 テレマコス	Book I. Telemachia	initial style
第3回 2019年10月20日	第2挿話 ネストール	Book I. Telemachia	initial style
第4回 2019年12月22日	第3挿話 プロテウス	Book I. Telemachia	initial style
第5回 2020年2月9日	第5挿話 食蓮人たち	Book II. Odyssey	initial style
第6回 2019年4月26日	特別回 第1挿話～第5挿話	Book II. Odyssey	initial style
第7回 2020年6月28日	第6挿話 ハデス	Book II. Odyssey	initial style
第8回 2020年8月23日	第7挿話 アイオロス	Book II. Odyssey	initial style
第9回 2020年10月	第8挿話 ライストリュゴネス族	Book II. Odyssey	initial style
第10回 2020年12月	第9挿話 スキュレとカリュブディス	Book II. Odyssey	initial style
第11回 2021年2月	第10挿話 さまよう岩々	Book II. Odyssey	initial style
第12回 2021年4月	第11挿話 セイレーン	Book II. Odyssey	
第13回 2021年6月	第12挿話 キュクロプス	Book II. Odyssey	
第14回 2021年8月	第13挿話 ナウシカア	Book II. Odyssey	
第15回 2021年10月	第14挿話 太陽神の牛	Book II. Odyssey	
第16回 2021年12月	第15挿話 キルケ	Book III. Nostos	
第17回 2022年2月	第16挿話 エウマイオス	Book III. Nostos	
第18回 2022年4月	第17挿話 イタケ	Book III. Nostos	
第19回 2022年6月16日	第18挿話 ペネロペイア	Book III. Nostos	

『ユリシーズ』とノートテイキング



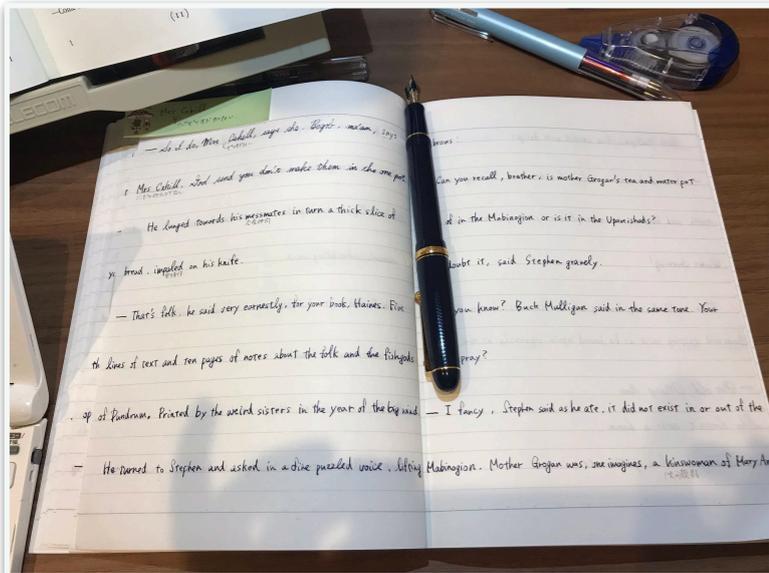
©三月うさぎ(兄)さん@march_hare_bro



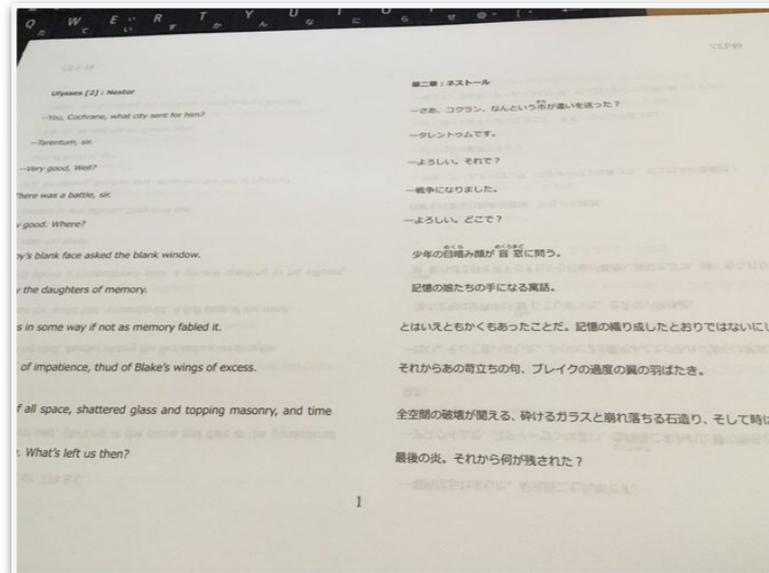
©オクスタ製文さん@oksta7



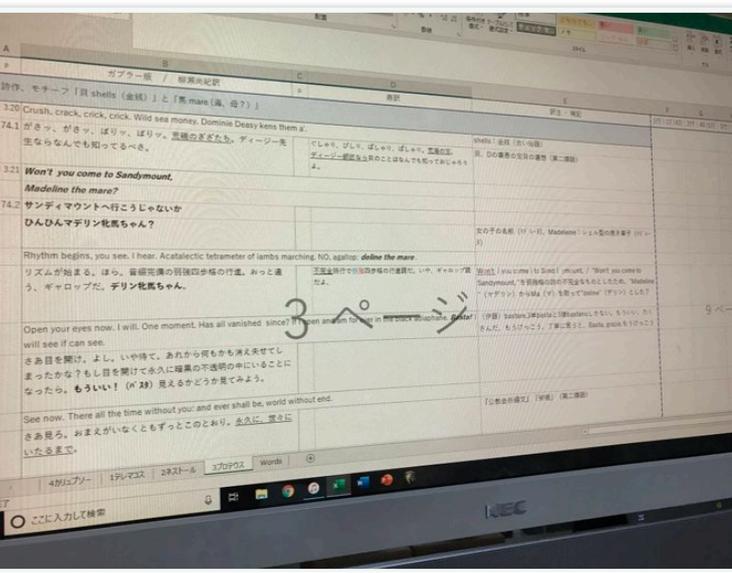
yoshimo maiさん@yoshino314



©トマトが主食のかぼちゃさん@sleepmyrtle



©きのさん@keni_keno



月と牧人ひつじを@melacavobene

『ユリシーズ』を読むための6つの方法

(1) 意味と「？」を集める蜜蜂になる

(2) 「小さな一つ」に情熱を注ぐ

(3) 寄り道をしながら誰かと読む

(4) 一介の生活者として読む

(5) ダブリン行きを楽しみにする

(6) すべてが繋がっている驚異に出遭う

▶ 『ユリシーズ』は、普通の人々が毎日送っている生活の現実を祝福するために書かれた。ボードレールからフローベールに至るまで、前世紀の最も力強い作品は、単に陳腐になってしまう都市の日課の反復性に対する著述家の公然たる抵抗が動機となって、日常生活への辛辣な批評を含んでいることが多い... ジョイスは全く異なる方法を取った。たった一日の詳細を記録することで、平凡な生活に潜む驚異的な要素を解き放つことができ、ありふれたものが驚嘆すべきものになると信じていたのである。(デクラン・カイバート『ユリシーズと我ら一日常生活の芸術』坂内正訳(水声社、2011年、24頁))

第1挿話

テーマ 登場人物 関連事項

人物のあだ名

「キンチ」・「耶穌会の怖い先生」(fearful Jesuit)・「べらぼうなイエズス会士」/「サクソン公」・「イギリス野郎」/「気働きマラキ」; マリガンのみは、「バック・マリガン」と呼ばれる。

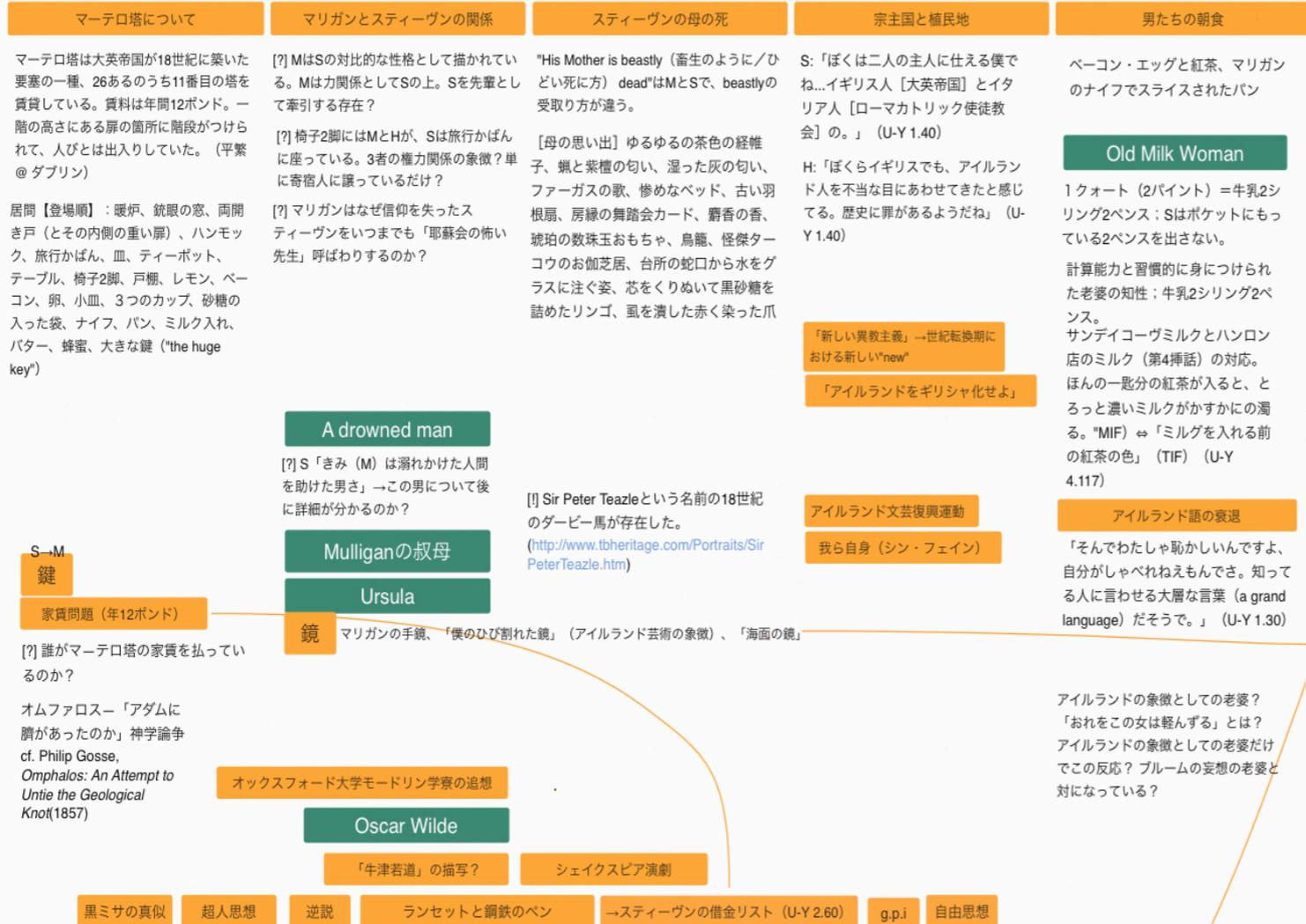
地名・場所の名前

ブロック港/キングズタウン (ダン・レアリー) の港/ダブリン湾/五尋湯/サンディコーヴ/マグリノ小島/ブレヘッドのずんぐり岬/ダンドラム/マター・リッチモンド病院/シップ酒場...

ポケットの中身

S: ハンカチ、2ペンス、大きな鍵
M: 1フロリン銀貨
H: 銀の煙草入れ、ニッケルのライター

マーテロ塔 (塔の上と塔の中)



Malachi/Buck Mulligan

Mは外見描写が豊富: ふくらかな体、頑丈ながっしりした体、淡いオークの木目色の髪/金髪 (日の当たり方で変わる?)、金歯と白くきらめく歯並び、黄色いガウン、おさまりの悪いタイ、メルクリウスの帽子、ブーツ
ワイルドを思わせるふっくらした体格? 社鹿のスマートイメージ? 慕尊者? 「脈絡のない男」? 気まぐれな男? ぶれない行動原理をもつ人物?
バック・マリガンの演じる声の役割: 説教師の口調、年寄女の謙し声(グロウガン嬢ちゃん)、よそゆきの声(学者風?), たるんだおめでたいたわけ声、若い女の口調

Haines

チョッキ、テニスシャツ、グレーの中折れ帽、スカーフ
黒豹の悪夢
銀の煙草入れとニッケルのライター
「ドイツ系ユダヤ人」に関するHの陰謀史観 (U-Y 1.41)
Hainesの父
ズール一族にヤラッパを売りつけて荒稼ぎ

マーテロ塔 (塔の上と塔の中)



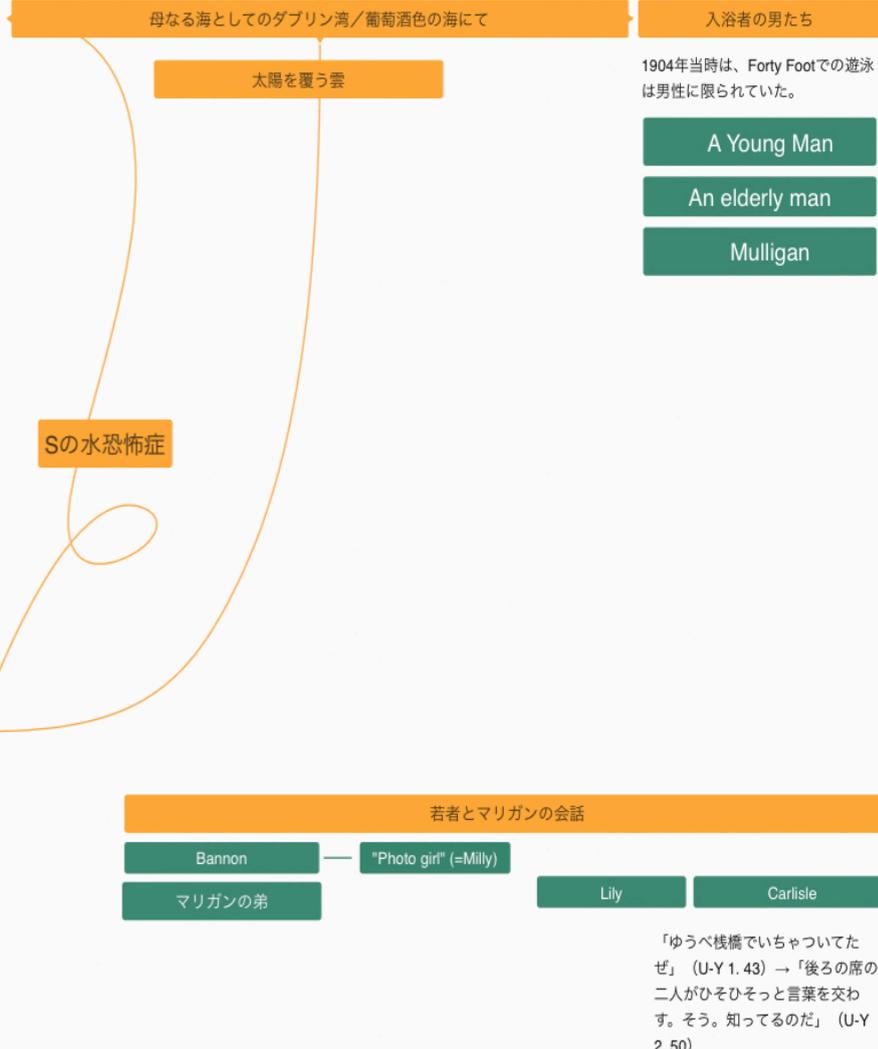
Stephen Dedalus

胸ポケットのハンカチ、黒い喪服; 裾のほつれているお古の服: 「セコハンとセコレグ」トネリコの杖
Sは、臨終の母のために祈ることを拒んだ。カトリック信仰の拒否。死後の世界から重庄を与える、幽鬼としての母: "let me be, let me live"→ハムレットとのつながり; ハムレット (の衣装を着た) との同一化?

母の死

風 W. B. Yeats, "Who goes with Fergus?" 臨終の祈り
[?] 「苦痛が、いまだに愛の苦痛ではないそれが」→母への愛でない、母の苦しみに寄せる愛ではない苦痛だとすれば、一体何の苦痛?
トネリコのステッキ; 詩人の象徴、スティーヴンの未来の予兆? ; トネリコ=ash, 死を比喩している?
→第4挿話のジョージ教会の吊鐘 (スライド参照)

フォーティ・フットでの海水浴へ (塔の外)



若者とマリガンの会話

Bannon "Photo girl" (=Milly) Lily Carlisle
マリガンの弟
「ゆうべ棧橋でいちゃついてたぜ」(U-Y 1.43) → 「後ろの席の二人がひそひそと言葉を交わす。そう。知ってるのだ」(U-Y 2.50)

郵便船 (mailboat) ブロック港に向かう帆船

朝夕08:15/20:15に港を出発し (Gifford 15)、ダブリンとウェールズのホリーヘッド間を一日2往復する。
[?]船頭と実業家: 誰を指している? 船は9日前に溺れた男を捜索している帆船?

[?] 「磯近くと沖合で海面の鏡が軽やかな靴をはいて駆ける足に踏んづけられて白くなる」→ 「軽やかな靴をはいて駆ける足」とは誰、何のこと?

起床後の行動→朝食→海水浴という3部構造を中心に形作られている。

第1挿話の復習

第2挿話

- テーマ
- 登場人物
- 関連事項

歴史/歴史観

年表上の歴史

B. C. 279年 アスクルムの戦い

1801年 連合法；グレートブリテン及びアイルランド連合王国が成立

1829年 カトリック解放令

1845-49年 ジャガイモ飢饉

1858年 アイルランド共和兄弟団（IRB）結成

IRB/フィニアン会 (@*)

1866年 (競馬) バリ賞

1870年 基礎教育法 (Elementary Education Act)

1882年 フィーニクス・パーク暗殺事件

1905年 A・グリフィス シン・フェイン党の設立

ディージー校長

虚ろなもの

貝

校長の部屋の「虚ろな貝殻」(パイ貝、宝贝、豹貝) 巻き貝、カタツムリとその殻；「目暗み顔」と「盲窓」(blank faceとblank window)；「空っぽの湾」(empty bay)；Sの空っぽのポケット。人が出払って空っぽの巻き貝型のマーテロ塔；貝のシンボリズム：金/貝の隠喩的關係（「金は力ですぞ」）；質としてのアイルランドの国土；誤った基礎にもとづいた歴史認識；[?] サージェントの算数の取組みに対してSを感じる"futility"と教育の虚しさ。

cf. W. B. イェイツの長編詩「内戦時の瞑想」("Meditations in Time of Civil War")には貴族文化の衰退を暗示する空の貝殻の詩句が含まれている；T. S. エリオットの詩「虚ろな人々」("The Hollow Men," 1925)

いまは亡き競争馬の肖像画
皇太子A.エドワードの肖像画

直線的な歴史観

「この問題に関しては意見が2つとないはずだ」←解釈を許さない歴史観；実証主義的な歴史；強者が作る帝国主義的な歴史観

「まっぐな道によりて (ペル・ウィアス・レクタス) (U-Y 2. 61) 「すべて人間の歴史は一つの偉大な目標に向かって動くのです、神の顕現に向かって」 (U-Y 2. 66)

cf. 「明白なる運命」(manifest destiny) と鉄道線路一直線の形象



Wikimedia

スティーヴン・デダラス

アリストテレス哲学と可能態

ありえたかもしれない世界の可能性；もしピュロスがアルゴスで一老婆の手に掛かって斃れなかったら？カエサルが殺されていないから？

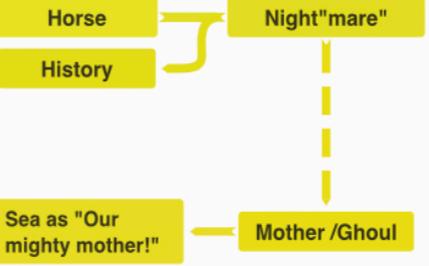
[?] 宗教と結びついた歴史から考察していくと、無神論者を志向するスティーヴンは、神の歴史観のもとにあるディージーを軽蔑している？

[?] Sは母の死に対して自責を感じて、自分も加害者であるかもしれない可能性の歴史を考えている？

血糊傷にまみれた(教科)書 —— 血滲みのちらし (U-Y 4. 113)

歴史という悪夢 (Night"mare")

nightmareはスティーヴンにとって「亡霊的なトラウマ」←その悪夢から目を覚ますとは何を意味するのか？；nightmareは循環史観のほうの馬ではないか？



! & ?

H・ブラックウッド・プライス

- リリー
- ヘインズ
- イーディス
- エセル
- ガーター

ヘインズ (U-Y 1. 41) の反ユダヤ主義；第4挿話ブルーム登場の予告

ディージー、口蹄疫 (foot and mouth disease) の治療をめぐる投書；テレグラフ紙と農業新聞アイリッシュ・ホームステッド紙上での掲載をSに依頼

←「国のなかに入れぬ」というアナロジ

反ユダヤ主義

ディージー校長のなぞなぞ
[?] なぜSはディージー校長のなぞなぞに対してなぜ笑うのか？

馬

Night-"Mare" 「歴史はぼくが目覚めようとしている悪夢なんです」；運動場での一つのゴールと歓声；「悪夢」が「蹴り返したら」どうするのか？「蹴り返す」とはどういう意味か？→領土的なニュアンスを含む) 反対陣営からの反撃と捉えることはできないか？

牛

「親牡牛派詩人」(U-Y 2.68) ←この名付け方には何かモデルがあるのか？

狐

母の記憶

スティーヴンのなぞなぞ

冥界の樹懶の牝

シティ・アームズ・ホテルでの家畜業者組合の会合；代議士のフィールド氏が手紙を代読

蝸牛

幼少期の記憶

学校の生徒たち

- アームストロング
- トールボット
- シリル・サージャント
- カミン
- コ克蘭
- ハリデイ

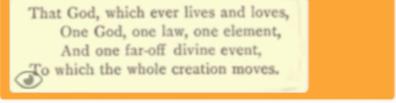
[?] ディージーとSの歴史観の外部にある「子供たちの歴史観」があるのではないか？
[!] 聖ヨセフ公立学校(U-Y 4. 107)との対応

[?] 子供たちは何歳くらいか？←10才くらいではないか？；木曜日が半日休みなのは私立の学校だからだろうか？

ドーキーと富裕層

Sの3ポンド12シリングの給料

運動場上のホッケー；ゴールと笛の音；テニスの『イン・メモリアム』末尾の詩句「一つのゴール」



第2挿話の復習

第3挿話の復習

- 第3挿話
- テーマ
- 登場人物
- 関連事項

スティーヴン・デダラス	ジョージ・バークリーの観念論 (<i>To be is to be perceived</i>)	順次と並列態	スティーヴンの詩作
-------------	--	--------	-----------

サンディマウントの磯、海風、足元の海藻や貝殻、波の音、濡れた砂、リーヒーの高台、船食虫に食い荒らされた船材、海落し卵、海捨て草、寄せる潮、色褪せたブーツ、産婆の?女性二人、男と女、泥砂、累々たる丸石、黒ピールの瓶、物干し綱、磯にされた二枚のシャツ、リングズエンド、舵取りや船頭の小屋、南岸壁沿いの積み重ねる石マンモスの頭蓋、丸石の防波堤、「菅やぬめぬめすべっこい昆布」、南中の太陽、トネリコのステッキ、ヒバマタ、ぶよっとむくんだ犬の骸、生きている犬 (Tatters)、鵜、とり貝、「今はなき土木師たちの築いた石垣」、ビジョンハウス、堤防、ぎざぎざの岩、水中で揺れる海草、「一隻の無言の船」

ダブリン地誌とサンディマウント周辺：キルケニー、聖カニス教会、ノー河畔のストロングボウ城、キッシュの灯台船、プールベック道路、リフィー川、サーペタイン通り、ハウス岬、リングズエンド、ビジョンハウス、ブラックピッツのオラフリン酒場
ファンバリー小路、ホッジス・フィギス書店、リーソン・パーク ダブリン湾口 フェザーベッド山、コック潟、シップ (酒場)

サンディマウント周辺

陸地/海になる境界的な場所としての浜 (cf. 遠浅の海における境界のぼやけ: "Am I walking into eternity?")

[?] スティーヴンはサンディマウントで何をしているのか?

[?] 海岸なのに海の匂いが描かれないのはなぜか?

犬 (Tatters)

海神プロテウスと変身 Dog / God

「パンの、牧神の真昼」 (U-Y 3.92) : 人間と動物の中間的な海神プロテウス; 境界のぼやけ。
「こけ犬わんちゃん」 (U-Y 3.88) ; 従属的な存在としての犬 (U-Y1.16)

砂州の上で鵜を追いながら変身する犬 (跳ね兎→牡鹿→熊→狼→子牛→犬→豹→禿鷹)

[!] 「海驢 (あしか) の波に吠えかかる」には "seamorse" に隠れた horse を馬偏として訳出しているのではないか?

Nacheinander (順次連続するもの) としての波 whitemaned—Mananaan—And and and and—Houyhnhnm

ホッケーのゴールが決まる
ディージー校長「すべて人間の歴史は一つの大きな目標に向かって動くのです」 (U-Y 2. 66)

女と男

"A woman and a man." (U 3.87) スティーヴンによって知覚された順番に語られる。
→"the ruffian and his strolling mort." (「やくざ者と辻君情婦」 U 3.89)

死んだ犬 (carcass)

[?] 冒頭の記述に予告されている「死体」としての "in bodies"? ; Sは死骸 (carcass) としての貝殻を踏みつけている?

[?] Tattersは浜辺で死んでいる犬をどう認識しているのか。動物はどのように「死」を認識しているのか。

「...二本の前足がぱしゃぱしゃ引っ掻いて掘る。何か埋めてるんだろよ、亡くなったお婆ちゃんでも。」

埋める行為と埋葬されたものを掘り返す; 死者を蘇らせるイメージ。

メイ・デダラスの死去

"poor bitch's body"—"beastly dead"
その死は『肖像』と『ユリシーズ』の間に位置づけられている。1903年6月26日に埋葬。

"Lawn" Tennyson: ホッケーとの対応?

アルフレッド・テニスン (1809-1892) 『イン・メモリアム』末尾の詩句

That God, which ever lives and loves,
One God, one law, one element,
And one far-off divine event,
To which the whole creation moves.

死者を媒介にした連想

メイデン岩沖での溺死事故

[?] 海 (羊水) のなかで揺られている溺死体には、まだ生きているイメージが付与されているのではないか?

オフィーリアの死体
ハムレットの墓掘り人夫

- 老婆
- フローレンス・マッケイブ夫人
- 死産した赤子
- オムファロス

「臍の尾 (navelcord) をひきずる死産の赤子、赤字の羅紗 (ruddy wool) にくるんで黙らせて。」 → [!] "ruddy wool" のなかに "Rudy" が隠れている。

想像された発話 1

- グールディング家
- リッチー叔父さん
- セアラ叔母さん
- ウォルター
- クリッシー

想像された発話 2

「もしもし!こちらキンチ。エデン市へ繋いでよ。アレフ、アルファ、〇〇ー」 (U-Y 3.74)

家庭で編み物をする女性の伝統的なイメージを利用した電話交換手の広告



cf. April Middeljans, "Weavers of Speech": Telephone Operators as Defiant Domestic in American Literature and Culture," *Journal of Modern Literature* (2010), vol. 33, no. 3, pp. 38-63.



cf. 「明白なる運命」と鉄道路線—直線の形象—電信線 (糸) を手繰る女神

創造行為としての鼻くその展示 → 青っ漢の海 (snotgreen sea)

[?] 岩場での犬のマーキング行為と関連があるのではないか?

[?] 「手元の仕事をさっさとすませる。」は何を意味しているのか?

パリの記憶

ケヴィン・イーガン

イカロス—鳥—鳩—Wild Geeseの連想
「茶の子」とは何か?

第4挿話の言葉の地図

テーマ 登場人物 関連事項

📌 (1) 第1挿話との対比 (2) 「意識の流れから隠れる事実」 (3) 『ユリシーズ』における「ユダヤ的」要素 (4) 植民地アイルランドと独立の問題 (6) ブルームの商い・貨幣経済に対する関心 (7) ブルームの身体的生理と排便の描写 (8) ブルームの動物に対する態度 (9) ブルーム家の生活空間におけるモノ (10) ブルームの科学的知識 (11) 市民生活とそこから疎外される存在 (12) 語りにおけるリズムミカルな音や音韻の仕掛け (13) ホメリック・パラレル (14) 人間が食べるもの、猫が食べるもの (15) 輪廻転生のモチーフ (16) 1904年6月16日の天気 (17) 小説における糞尿・排便描写

**metempsychosis (柳瀬訳:「会者定離輪廻」)

→"metpikheoses" (p.266)

排便・糞尿・排泄物

「雨が降らないと、いい卵はない」(p.103)
庭に肥料(鶏の糞;牛の糞)をまいて、「豊穡」の地を考えるブルーム (p.122)

ブルーム、「ティッドピッツ」誌を読みながら、排便をする;3段半(一段(column)につき1ギニーの原稿料)の原稿量と排便量の対応;臓器による連関:ブルームの腎臓と排尿

手紙

ミリーからブルームへの手紙
ポイランからモリーへの手紙

腰の曲がった老婆

ブルームの思念「不毛の地、何一つ生えない荒れ地」(p.110)の直後、アッパー・ドーセット通りの酒店キャンディの店から出てくる老婆;「荒廃」の主題とブルームの性的不安

1904年6月16日の天気

同一語句の反復による雲の描写と第1挿話との時間的対応:「雲が一つ、太陽をゆっくりと覆い始めた」→(p.110)「雲がゆっくり動いてすっぽり覆い」(p.21);挿話中に挿入される天候描写の導入(pp.101,103,104,106,108,110,111,121,124)→「そろそろ洗濯物を外へ吊るす頃だが」(p.121)

ホメリック・パラレル

サンダル履きの足で、俺を出迎える娘、金髪を髪になびかせて(p.111)

壁に掛かった「ニンフの湯浴み」の絵;(ギ)女神カリュプソーと囚われのブルーム

第1挿話との「対応」

ブルームとスティーヴンの対比;母親の肝臓とブルームの糞物好き;動物(beast)に対する扱いの違い;スティーヴンは観念的・形而上的なもの、ブルームは身体的・日常的なもの、モリーは感覚的・肉感的なもの結びついている;スティーヴンが鍵を閉めること、鍵を閉めないブルームの対比→鍵をもっていない主人公のテーマ

ハンロン牛乳店の配達人

郵便屋

Molly (Marion) Bloom

男性器のイメージ→生殖・モリーのポイランとの情事;口を尖らせたポット;ミルクを注ぎ込む紅茶のポット

1889年の実際の作品をもとにしたサーカスを舞台とした小説 Rudy, Pride of the Ring

Hugh Blazes Boylan

Milly Bloom

ブルームからベレー帽の誕生日プレゼントを受け取る
ブルームとモリーの娘、15歳;6月15日生まれ;マリンガーの写真店で勤務;選給12シリング6ペンス

グレヴィル・アームズでのコンサート

Banon

ミリーとピクニックの約束

Coghran

写真店オーナー

暗闇で光るヒゲ
宝石のような緑の瞳
「おバカな」猫のイメージ
伝染病と猫の実用性
白いボタンのようなお尻
ざらざらの猫の舌
ブルーム家の猫
血とミルク→コーシャー
ネズミを弄ぶ「残酷さ」
猫語(Mrkgnao)
ブルームの間違った科学的知識

「洗濯ソーダで荒れた手」
ウッズ家の女中
ブルームの「尻」への関心
ユダヤ人・ユダヤ教・ユダヤ性
緑々の皿:コインを飲み込む商人の指(舌)
コーシャー
Moses Dlugacz

排便
朝食の準備
猫の世話
尻のポケット
部屋の前付け
ハングレー・サーカス団の思い出
買物
ケイヘル通りの図書館への本の貸出延期
ディグナムの葬式
モリーとポイランの密会についての想念
ミリーと愛蘭号に乗船した思い出
商売・貨幣経済への関心;ダブリンの地価;マッコリーの店の立地;アジェンダス・ネットタイム拓殖会社への投資;黒ビールの原価と収益

Leopold Bloom
「サンドウ体操」と健康への意識

Larry O'Rourke
前掛け姿のバーテン
市の交通のちょうど終点にある、立地のよい酒場を経営

Paddy Dignam

Rudy Bloom

ブルーム家の家具・所持品

- ・プラストウ高級帽
- ・遺失物取扱所の古物防水服
- ・ブルームのズボンとベルト
- ・厚ぼったい外套
- ・ティースプーン・フォーク
- ・ティーポット
- ・蓋付きカップ(ミリーがくれた誕生日プレゼント)
- ・紅茶のコップ・猫のミルク皿
- ・表戸の鍵・ポケットのなかのジャガイモ
- ・『ティッドピッツ』の古い号
- ・緑の欠けた茹で卵入れ
- ・でこぼこしたお盆
- ・修理が必要なベッド(オークションで競り落とした嫁入り道具)
- ・オレンジの鍵模様のある室内型便器と壊れた室内型便器
- ・ブルームの書物机
- ・庭の壁隅に生えているスペアミント
- ・アンドルーズの店のオリーブの実
- ・バター・パン
- ・ハンロン店配達人のミルク
- ・台所のテーブル
- ・台所の湯沸かし
- ・調理用暖炉の石炭

第4挿話の復習

第5挿話

テーマ 登場人物 関連事項 【ブルームの足取り】 サー・ジョン・ロジャース船寄通り→ウィンミル小路→リクス亜麻仁加工所→海員宿泊所→ライム通り→プレイディ路地→タウゼンド通り→救世軍会館→ニコルズ葬儀屋→ウエストランド通り→郵便局→ブランズウィック通り→御者溜まり→カンバーランド通り・ミードの材木置き場→線路のガード下→教会→ウエストランド通り→スウィニー薬局→トルコ風呂

花 香 バディー・ディグナムの死 誤解・誤字・誤読

Henry Flower (偽名)

サボテンの花、睡蓮、マーサの手紙の中の黄色い花、ピールの樽のなかの泡立つ、どろどろした「白泡の花びら」(U-Y. 3.93)、「一輪のものうげな漂う花」(U-Y 5. 152)

[?] 黄色の花は何の花だったのか? ; スイセン (narcissus) ? ; スミレ? ; 黄色のバラは嫉妬を表わす?

"Hammam. Turkish. Massage. ... Nicer if a nice girl did it."

[?] 浴場で体を洗ってくれるサービスはどのようなものであったのか?

水中花; 子宮のなかでたゆたう生の誕生のイメージ? ; ブルームの身体が花に擬せられている

Rudolf Virag (viragはハンガリー語で「花」)

[?] トリカブトの花が想像されている?

[?] ブルームの父の死はブルームの男性性の喪失につながっているのか?

[?] ブルームの父が自殺したかは第5挿話からだけでは想定できない→「あんな死に方をして!」(U-Y 5.136)

香

髪油の匂い; 印刷したての新聞紙の匂い、ジンジャーエール(芳香性)、馬尿の匂い、モリーの香水(「スペインの肌」)を知りたがるマーサ; 線香の匂い、教会石段の「聖なる石のひんやりする匂い」、「薬品のつーんと鼻を衝く匂い」、「海綿や糸瓜束子のほこりっぽい匂い」、レモン石鹸の香り

L Leopold Bloom

帽子のヘッドバンドに書かれた"Plasto's high grade ha."における、消えた"l"の文字

リフィー側南岸

L "Bethel. El, yes" ; "...Ale, Summer sale ; World-Word

皮剥ぎ手伝いの、煙草を吸う少年

ブルームの誤った自然科学に関する知識

M Martha Clifford

タイプライターで書かれた手紙のなかの誤字"I do not like that other world." (U 5.246)

Bantam Lyons

ブルームの「新聞を捨てる」(throw away)という言葉が馬の名前として誤読する

アスコット競馬

黄ばんだ黒爪の指 (U-Y 5.150)

レンスター通りの浴場

水を怖がるスティーヴンとは対照的に身体を水で清めるブルームの衛生観念; cf. 世紀転換期のダブリンの街路の不衛生な状態 (U-Y. 1. 29)

リンカン・プレイスのスウィニー薬局 (U-Y 5.)



B. Lyons

鎮痛芥子シロップ、クロロホルム麻酔

- ブルームの父の死
- 息子ルーディーの死
- スティーヴンの母の死
- 重層する誕生と死のイメージ

水

リフィー川、香水、(頭に乗せる)水瓶、アルキメデスの原理、黒ビール、ジンジャーエール、葡萄酒、忘却の水、化粧水、風呂場の水

教会内での独白における "her" はマーサのこと? ; マーサは続く挿話で再登場するのか?

オール・ハロース教会

酪酊と陶醉、酒と聖水 黒ビール、ジンジャーエール、葡萄酒、聖水

子供と猫

広告

(検屍官) M'Coy

メイデン沖での溺死事故

M'Coy: 誰が演奏会を仕立てているの? "Who is Getting it up?" ; 「誰のお膳立て?」 ← "Not up it" (U-Y 5 134)

M Molly Bloom

ブルームの「新聞を捨てる」(throw away)という言葉が馬の名前として誤読する

アスコット競馬

黄ばんだ黒爪の指 (U-Y 5.150)

香水・化粧水 棒状のもの

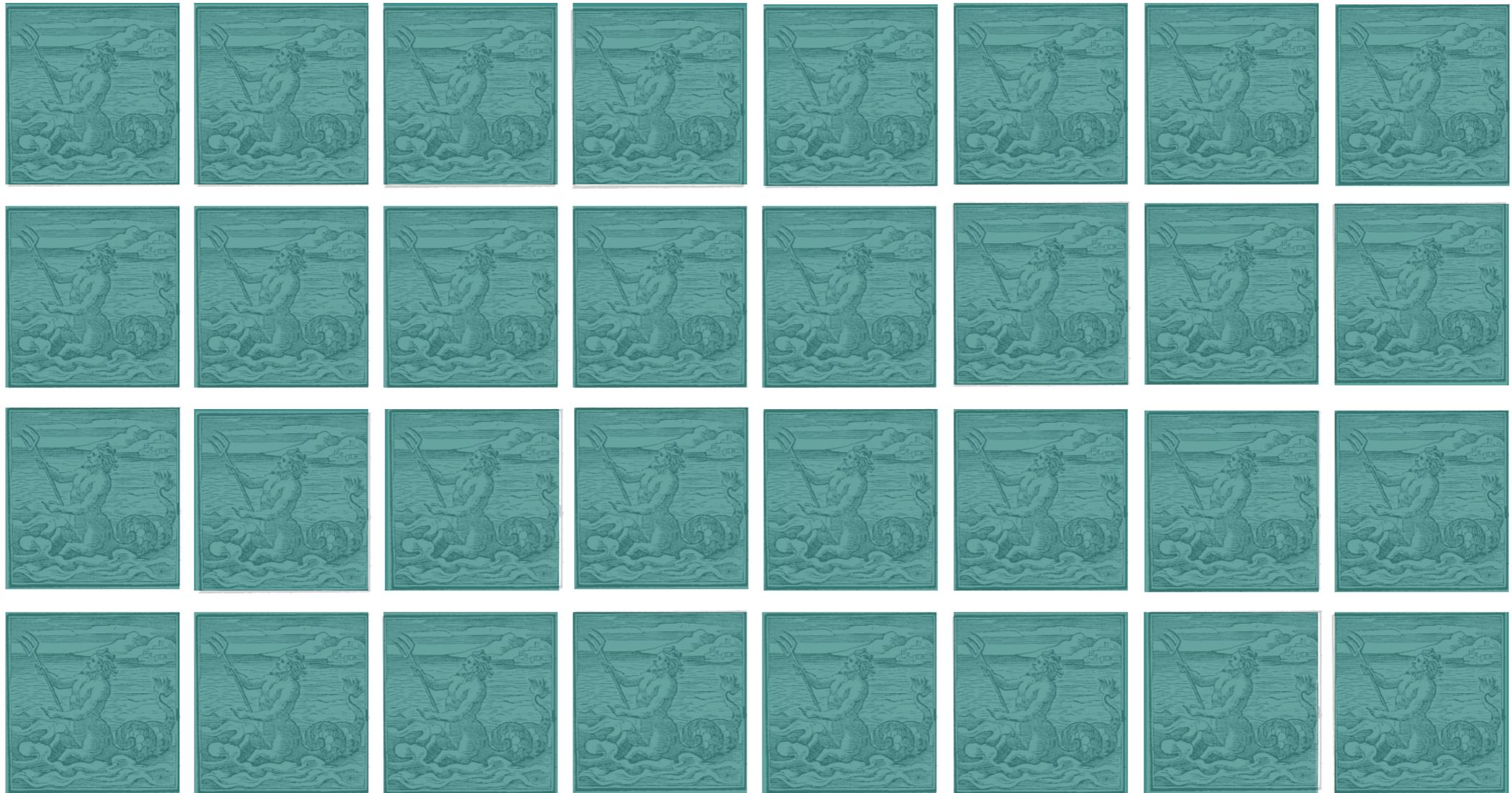
(Blazes Boylan)

ボイルンの男性器; I.N.R.I (Iron nails ran in.); Freeman's Journal紙のバトン、輻(や); spoke spoke spoke; 箸; クリケットのバット

M Milly Bloom

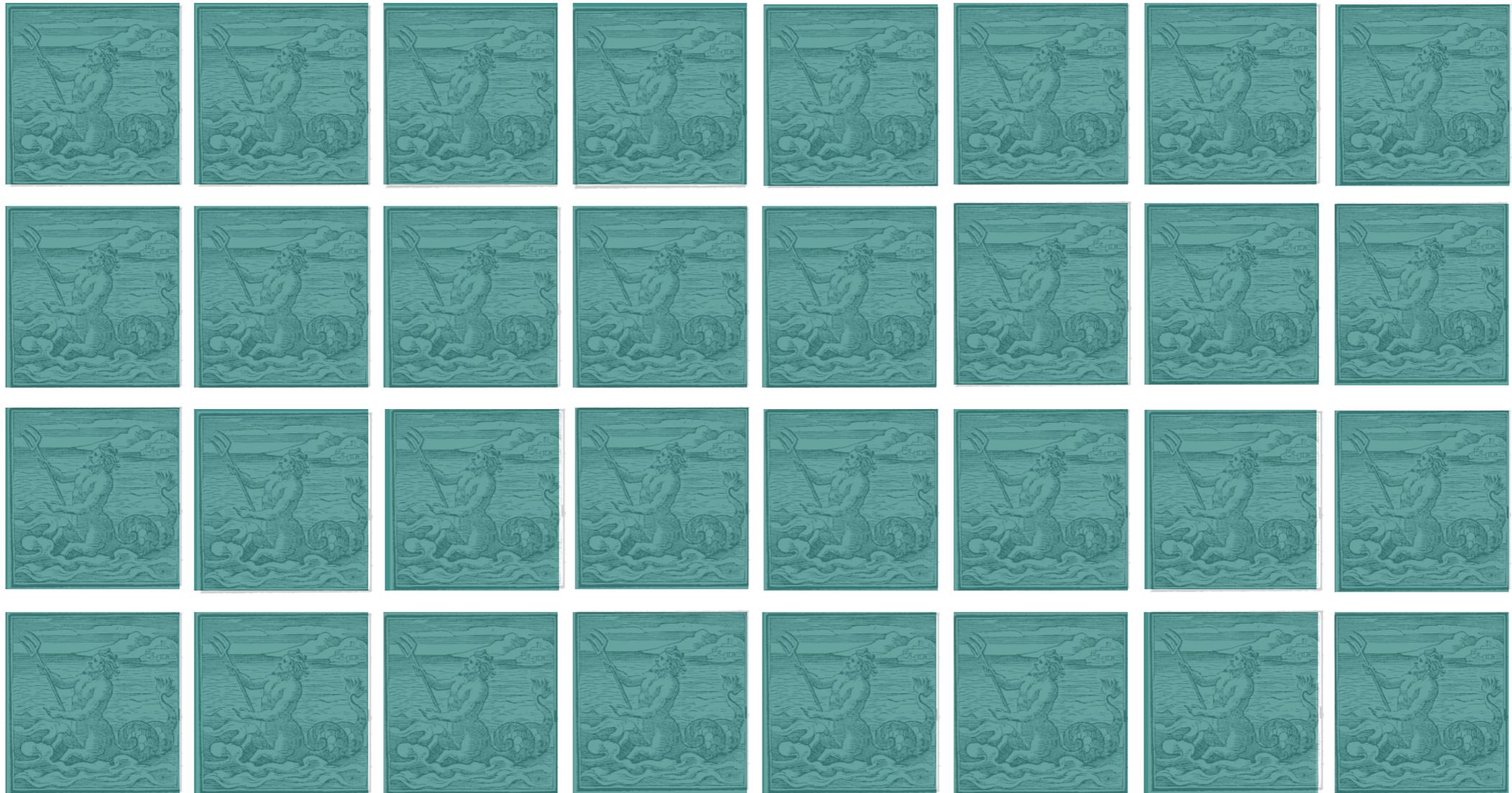
第5挿話の復習

『ユリシーズ』 第1挿話 テレマコス



“ふんぞり返って、ふくらかなバック・マリガンが階段のてっぺんへ現れた。捧げ持つ石罅の泡立つ丸い器にのせて、手鏡とカミソリが十文字に…” (U-Y 1. 11)

『ユリシーズ』 第2挿話 ネストール



“—さあ、コクラン、なんという市が遣いを送った？” “—タレントウムです。”

“よろしい。それで？” “—戦争になりました。” “よろしい。どこで？” (U-Y 2.49)

『ユリシーズ』 第3挿話 プロテウス



“可視態の不可避の様式。少なくともそれ、それ以上ではないにしても、おれの目を通しての思考。万物の署名をおれはここで読み取る” (U-Y 3. 73)

『ユリシーズ』 第4挿話 カリュプソー



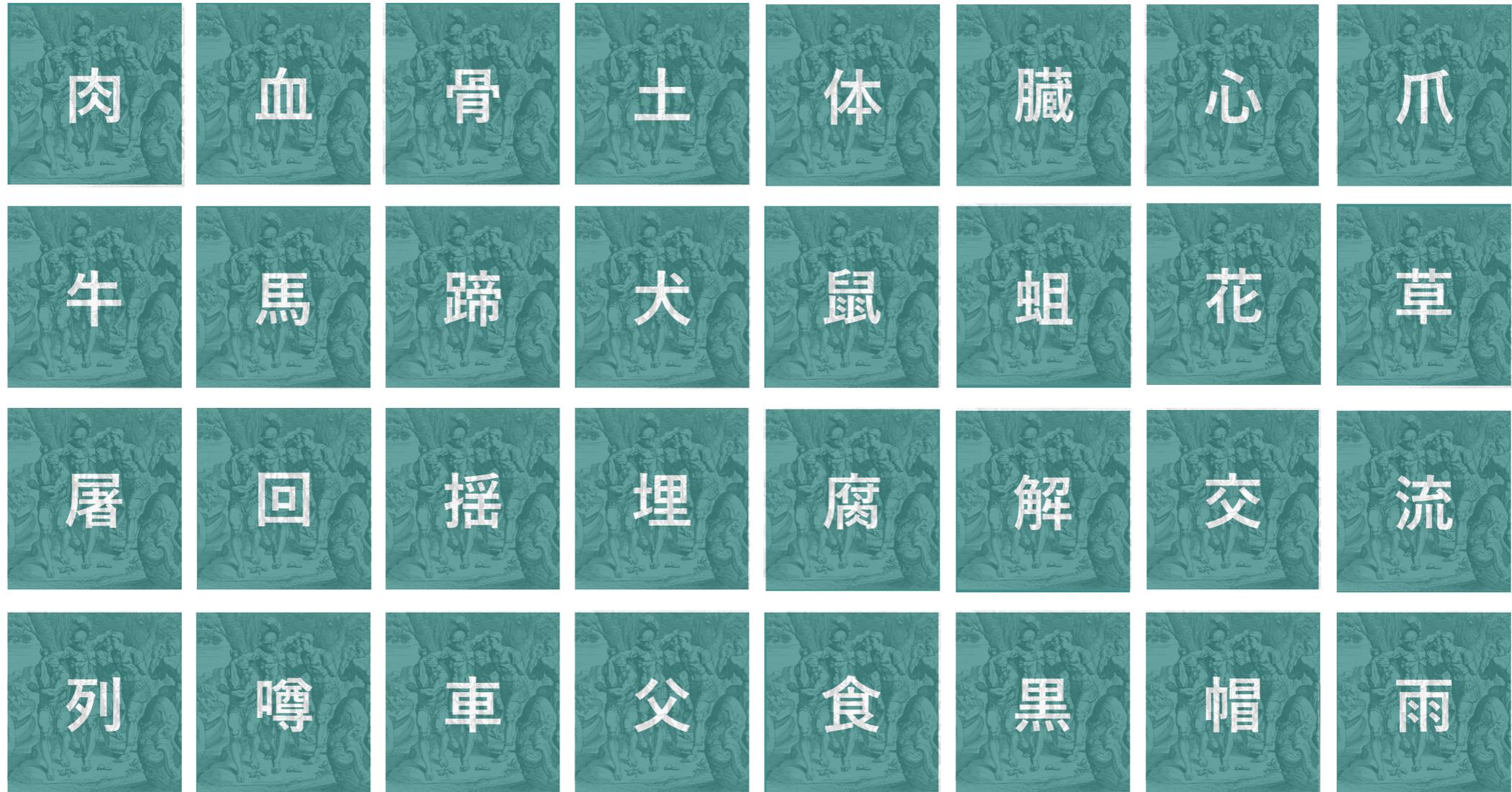
“リアポウルド・ブルーム氏は禽獣の臓物をうまがる男である。どろっとしたもつがらスープもいいし、こりこりする砂肝、詰め物をして焼いた心臓…” (U-Y 1. 11)

『ユリシーズ』 第5挿話 食連人たち



“荷台車の連なるサー・ジョン・ロジャースン船寄せ通りをブルーム氏は粛々と歩いた。
ウィンドウミル小路を過ぎ、リークス亜麻仁加工所、郵便電報局を過ぎる…” (U-Y 5. 127)

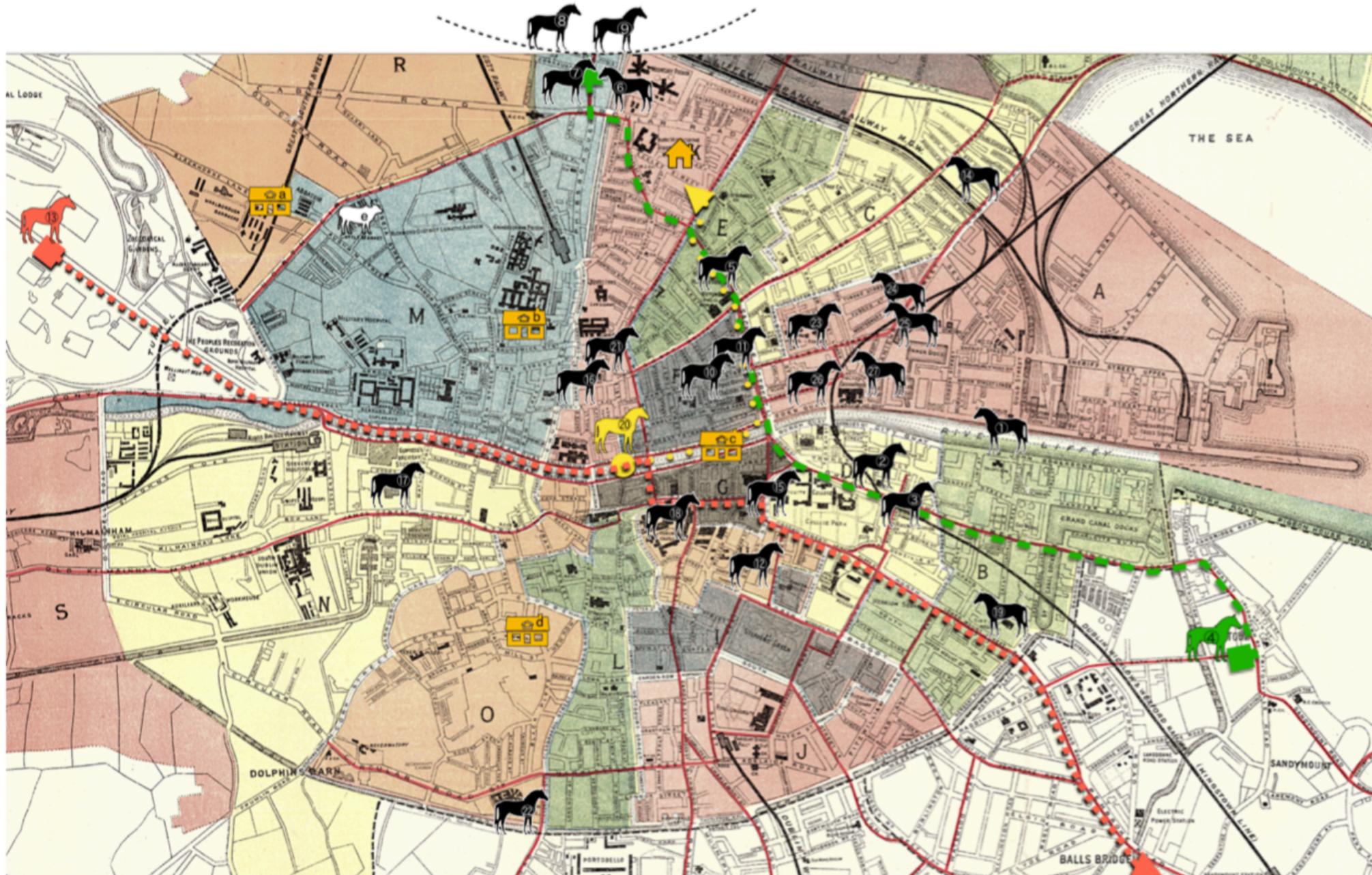
『ユリシーズ』 第6挿話 ハーデス



“マーティン・カニンガムが、まず先に、シルクハットの頭をギッターと軋む馬車の中へ差し入れ、するりと乗り込んで席におさまった…” (U-Y 6. 155)

第6挿話 会葬馬車のルート

- - - - - ▶ The Funeral Hearse in "Hades"
 - - - - - ▶ The Cavalcade in "Wandering Rocks"
 - - - - - ▶ Boylan's Jaunting Car in "Siren"



*Horse Map is adapted from 1899 colored map in Thom's directory, distributed by Ian Gunn (<http://www.riverrun.org.uk/joycetools.html>). Reprint with permission.
 *In addition to horses and carriages, I also include the approximate positions of three knacker's yards and an abattoir in Dublin: Bartholomew M'Keon's at Red Cow Lane (a), north of Smithfield, Edward O'Keeffe's at Mill Street (b), and the one at Merchant's Arch in Temple Bar (c). The abattoir (d) located at the opposite side of the cattle market (e) on the North Circular Road was opened in 1882 (Daly 261).

第6挿話 Hades

13:00-13:30 準備：Zoomの練習・操作案内

13:30-13:40 挨拶

13:40-14:40 第1部：主催者トーク

14:40-15:00 休憩

15:00-16:00 第2部：第6挿話の「言葉の地図」作成／ディスカッション

16:00-16:10 休憩

16:10-17:10 第3部：第6挿話の「テーマパネル」作成

17:10-17:30 挨拶・次回について

17:30 ~ オンライン懇親会

Book I

第1挿話（テレマコス）

登場人物：スティーヴン・デダラス、バック・マリガン、ヘインズ、ミルク売りの老婆

- ①「マーテロ塔」の位置と構造
- ②登場人物たちのあだ名について
- ③登場人物たちのポケットには何が入っている？
- ④大いなる海と大いなる母—母の死と溺死の関係
- ⑤「アイルランド芸術の象徴」としての「僕のひび割れた鏡」
- ⑥ミルク売りの老婆とアイルランド性
- ⑦ヘインズと大英帝国（植民地主義）
- ⑧鍵の所収者と家賃問題
- ⑨男たちの朝食と紅茶
- ⑩シェイクスピアと『ハムレット』

第2挿話（ネストール）

登場人物：スティーヴン・デダラス、コ克蘭、アームストロング、コミン、タルボット、シ rilル・サージェント、ギャレット・ディージェー

- ①「歴史とはぼくが目覚めようとしている悪夢」とは？
- ②直線的な歴史観と明白なる運命
- ③「虚ろなもの」（貝、窓、湾）が意味するものは？
- ④ドーキーと富裕層、アングロ・アイリッシュについて
- ⑤アリストテレスの哲学と可能態
- ⑥狐のなぞなぞ
- ⑦反ユダヤ主義とディージェー校長のなぞなぞ
- ⑧馬と牛の口蹄疫とアイルランド経済
- ⑨お金、給料、借金
- ⑩教える者と学ぶ者

第3挿話（プロテウス）

登場人物：スティーヴン・デダラス、浜辺を歩く二人の老婆、犬("Tatters")を連れた男と女、犬の死骸

- ①スティーヴンが実践するバークリーの観念論
- ②サンディマウントとはどんな場所？
- ③「順次」と「並列態」の具体例は？
- ④海神プロテウスをつかまえる方法
- ⑤二人の老婆、ジプシー風の男と女、二匹の犬
- ⑥なぜジョイスは浜辺で死んでいる犬を描いたのか
- ⑦「誰が話している？」—グールディング家内の会話
- ⑧「こけ犬わんちゃん(dogsbody)」と犬の死体(dog's body)の関係
- ⑨墜落と帰還—スティーヴンのパリの記憶
- ⑩詩作と鼻くそ—スティーヴンの創造行為

Book II

第4挿話（カリュプソー）

登場人物：リアポウルド・ブルーム、黒猫、モリー・ブルーム、ドルーガック肉店の主、ミリー・ブルーム、ブレイゼズ・ボイラン

- ①二つの太陽を覆う雲
- ②誰が何を食べている？—人間と動物の食生活
- ③ブルーム家の猫の謎
- ④ドルーガック肉店とユダヤ的なるもの
- ⑤「手紙は誰に？」—モリーとボイラン、ミリーとバノン
- ⑥「会者定離輪廻」(Metempsychosis)という鍵語
- ⑦ブルームの帽子と鍵
- ⑧ホメリック・パラレル—カリュプソーと「ニンフの沐浴」
- ⑨ブルームの子どもたち—娘ミリーとルーディ
- ⑩第4挿話にはなぜ排泄物が描かれるのか？

第5挿話（食蓮人たち）

登場人物：レオポルド・ブルーム、マーサ・クリフォード、C・P・マッコイ、スウィニー薬局の主、バンタム・ライアンズ

- ①ホメリック・パラレル—食蓮人と麻痺
- ②この街ではいつも誰かが見ているかもしれない—窃視症と窃視不安
- ③ヘンリー・フラワーとマーサ・クリフォードのエロティックな文通
- ④第5挿話に隠れた花を見つけ出す
- ⑤読みまくるブルーム—手紙、新聞記事、広告
- ⑥父ルドルフ・ヴィラークの死
- ⑦ブルームの性的不安
- ⑧教会とミサ（告解と改悛）
- ⑨きれい好きのブルーム—スウィニー薬局の石鹸と温水浴場
- ⑩ジョイスの間違いは間違わない—バンタム・ライアンズの勘違い

第6挿話（ハーデス）

登場人物：ディグナム、①レオポルド・ブルーム、②マーティン・カニンガム、③ジャック・パワー、④サイモン・デダラス、ブレイゼズ・ボイラン、ルーベン・J・ドッド、⑤トーマス・カーナン、⑥ネッド・ランバート、⑦ジョー・ハインズ、⑧コーニー・ケラハー、⑨ジョン・ヘンリー・メントン、コフィ神父、侍祭、⑩ディグナムの長男、⑪義理の弟、⑫ジョン・オコンネル、⑬マッキントッシュ、（マッコイ）、墓掘人たち

- ①葬列の伝統と会葬馬車によるダブリンツアー
- ②登場人物の急増+ダブリンの（名無しの）働く人々と動物
- ③ガラス／窓の向こうから見つめる目
- ④ダブリン市民のあいだの反ユダヤ主義
- ⑤様々な話のモード—罵声、ジョーク、噂話、ひそひそ話
- ⑥早すぎる息子の死と父ルドルフの服毒死
- ⑦早すぎる埋葬とブルームの死をめぐる奇想：地面・地下への下降
- ⑧ブルームの都市計画：合理化・効率化について
- ⑨都市に生きる「迷惑な」動物たち
- ⑩雨外套の男「マッキントッシュ」の謎

第6挿話におけるキャラクターの急増——ダブリン市に生きる人々と動物——

1. †パディー・ディグナム
2. ①レオポルド・ブルーム
3. ②マーティン・カニンガム
4. ③ジャック・パワー
5. ④サイモン・デダラス
6. スティーヴン・デダラス
7. ブレイゼズ・ボイルン
8. ルーベン・J・ドッド
9. ⑤トーマス・カーナン
10. ⑥ネッド・ランバート
11. ⑦ジョー・ハインズ
12. ⑧コーニー・ケラハー
13. ⑨ジョン・ヘンリー・メントン
14. コフィ神父
15. ⑫ジョン・オコネル
16. ⑬マッキントッシュ
16. 会葬馬車を引く馬
17. 会葬馬車の御者
18. 窓から葬列を覗く老婆
19. アイリッシュタウンの通行人
20. 葬儀屋・遺体整復師
21. 電車道の転轍手
22. 黒紗を腕につけた義理の親戚
23. だらしのない身なりの靴紐売りの老人・元弁護士
24. 舢舨の男と曳舟馬
25. 家畜追立人 (drover)
26. 家畜追立人に誘導される牛、羊
27. ダンフィーに立ち寄っている別の会葬馬車の人々
28. 道端に座り込んだ年老いた浮浪者
29. 御影石を載せた馬車の馬引
30. ⑩ディグナムの長男
31. ⑪義理の弟
32. 侍祭
33. 雇われ葬儀人
34. 墓掘人たち
35. 驢馬
36. ポプラの枝に止まった鳥
37. 墓地の鼠

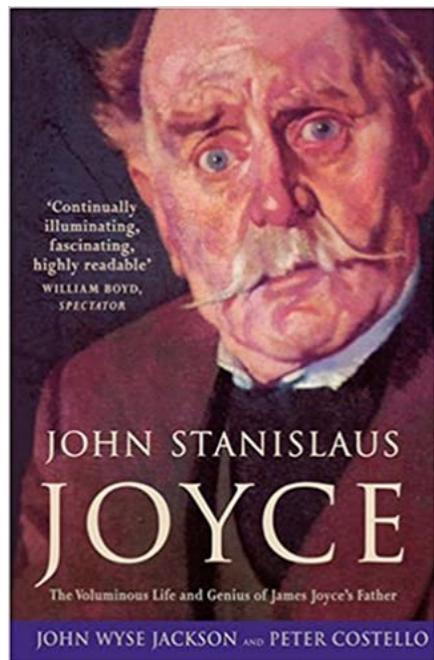
38. 壺製造ウォレス兄弟
39. リッチー・グールドینگ (法律事務所)
40. イグネイシャス・ギャラハー
41. マリガン
42. ビーター・ポール・マクスウィニー
43. ルーディ
44. 窓越しにのぞく巡査
45. ミリー
46. フレミングさん
47. †アトス
48. †ルドルフ・ブルーム
49. ルドルフの死を検分した検死官
50. パディ・レナード
51. ベン・ドラード
52. ダン・ドゥスン
53. カラン・コウルマン
54. フォーセット
55. ラウリー
56. ノーマン
57. ビーク
58. ヘンリー・クインラン
59. ユージーン・ストラットン
60. バンドマン・パーマー夫人
61. メアリー・アンダーソン
62. ルーイ・ワーナー
63. J・C・ドイル
64. ジョン・マコーマック
65. クロフトン
66. ジュアリ・ホテルのバーの女給
67. ルーベン・J・ドッドの息子を助けた船頭
68. †マシュー神父
69. マーティン・カニンガムの妻
70. †リオルダンの婆さん
71. ブルームを刺した蜂
72. インターンの医者
73. カフ
74. フォーガティのおっさん
75. 墓守のジミー・ギアリー
76. シーモア・ブッシュ
77. サミュエル・チャイルズ
78. トッド
79. ルドルフについて証言をしたクイーンズホテルのボーイ
80. ディグナム家の5人の子どもたち
81. ディグナムの妻
82. ヴィクトリア女王
83. アルバート (オブ・ザクセン)
84. ディック・ターヴィー
85. マーヴィン・ブラウン
86. マリアン・トウィーディー
87. マット・ディロン
88. ウィズダム・ヒーリー
89. ギャンブル少佐
90. マスティアンスキー
91. マッコイ
92. 墓場の蛆
93. 齧齧蟻
94. メサイアス
95. ブルーム家の墓掃除をしてくれる爺さん
96. †ミリーが埋めた小鳥
97. ロバート・エマリー
98. †シニコウのおかみさん
99. フロウィー・ディロン
100. マーサ
101. 参事会員フーパー
102. †バーネルの礎石
103. †ダニエル・オコネルの彫像
104. †フィリップ・クランプトンの胸像
105. †ネルソンの記念柱
106. †プロスペクト墓地の沈黙の像
107. †オコネルの塚

“How many! All these here once walked round Dublin.” (U 6. 960)

サイモン・ディーダラスと罵り言葉

「息子の体づくりのために、父親はジョン[スタニスロース・ジョイス]をクイーンズタウンに寄稿する大西洋航路定期船の水先案内をするパイロット船に乗せた。息子のスタニスロース【ジョイスの弟】がほのめかしているところによれば、おかげで罵り言葉や卑猥な言葉がたっぷり身についた。」(リチャード・エルマン, 『ジェイムズ・ジョイス伝 1』 宮田恭子訳, 15頁; see also J. W. Jackson and Peter Costello, *John Stanislaus Joyce: The Voluminous Life and Genius of James Joyce's Father*, pp. 264-65; アラン・カバントウ『冒瀆の歴史』, pp. 140-45)

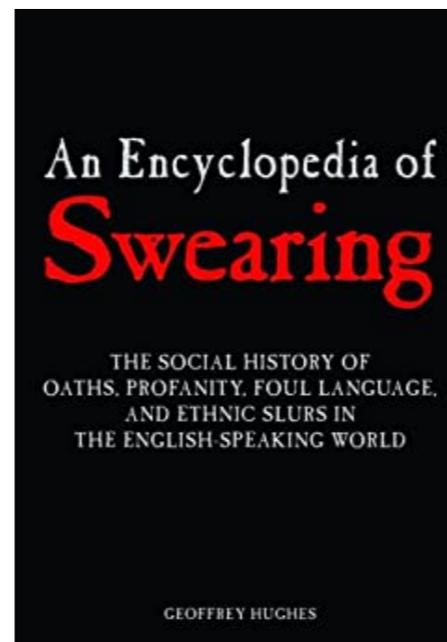
→idm: “swear like a sailor”:



J. W. Jackson and Peter Costello, *John Stanislaus Joyce: The Voluminous Life and Genius of James Joyce's Father* (Fourth Estate, 1998)



アラン・カバントウ『冒瀆の歴史』平尾隆文訳, 白水社, 2001年



Geoffrey Hughes, *An Encyclopedia of Swearing: The Social History of Oath, Profanity, Foul Language, and Ethnic Slurs in the English-Speaking World*. (Routledge, 2006)

—あのマリガンのろくでなしもいたかい?あれの股肱の大臣(フィドウス・アカテス)は!(U-Y 6.157)

グールディング家の一味だ。飲んだくれのちんけな代言銭せびりパパの脱糞愛子のクリッシー(U-Y 6.157)

—下の下の輩もとつるみおって、と、Jデッダラス氏が声を荒らげた。あのマリガンつてのは誰に聞いたって腐れきった根っからべらぼうな悪党だ。ダブリン中の鼻つまみ者めが。……とにかくやつのけつの皮をひんむいてやる。

[...]

—どこの馬の骨だか分らん女の甥っ子なんぞに伴を台無しにされてたまるかい。(U-Y 6. 157-58)

デッダラス氏が眼鏡の奥から雲間の太陽を覗き、無言の悪態を空に投げつける。

—子供の尻みたいに当てにならん、と、言った。(U-Y 6.161)

—デッダラス氏が[ルーベン・Jが]のたのた行く姿を目で追いかけて、声を落して言った。

—悪魔に背骨をへし折られるがいい!(U-Y 6.166)

miss this chance. Dogs' home over there. Poor old Athos! Be good to Athos, Leopold, is my last wish. Thy will be done. We obey them in the grave. A dying scrawl. He took it to heart, pined away. Quiet brute. Old men's dogs usually are.

A raindrop spat on his hat. He drew back and saw an instant of shower spray dots over the grey flags. Apart. Curious. Like through a colander. I thought it would. My boots were creaking I remember now.

—The weather is changing, he said quietly.

—A pity it did not keep up fine, Martin Cunningham said.

—Wanted for the country, Mr Power said. There's the sun again coming out.

Mr Dedalus, peering through his glasses towards the veiled sun, hurled a mute curse at the sky.

—It's as uncertain as a child's bottom, he said.

—We're off again.

The carriage turned again its stiff wheels and their trunks swayed gently. Martin Cunningham twirled more quickly the peak of his beard.

—Tom Kernan was immense last night, he said. And Paddy Leonard taking him off to his face.

—O, draw him out, Martin, Mr Power said eagerly. Wait till you hear him, Simon, on Ben Dollard's singing of *The Croppy Boy*.

—Immense, Martin Cunningham said pompously. *His singing of that simple ballad, Martin, is the most trenchant rendering I ever heard in the whole course of my experience.*

—*Trenchant*, Mr Power said laughing. He's dead nuts on that. And the *retrospective arrangement*.

—Did you read Dan Dawson's speech? Martin Cunningham asked.

—I did not then, Mr Dedalus said. Where is it?

—In the paper this morning.

Mr Bloom took the paper from his inside pocket. That book I must change for her.

—No, no, Mr Dedalus said quickly. Later on please.

Mr Bloom's glance travelled down the edge of the paper, scanning the deaths: Callan, Coleman, Dignam, Fawcett, Lowry, Naumann, Peake, what Peake is that? is it the chap was in Crosbie and Alleyne's? no, Sexton, Urbright. Inked characters fast fading on the frayed breaking paper. Thanks to the Little Flower. Sadly missed. To the inexpressible grief of his. Aged 88 after a long and tedious illness. Month's mind: Quinlan. On whose soul Sweet Jesus have mercy.

*It is now a month since dear Henry fled
To his home up above in the sky
While his family weeps and mourns his loss
Hoping some day to meet him on high.*

I tore up the envelope? Yes. Where did I put her letter after I read it in the bath? He patted his waistcoatpocket. There all right. Dear Henry fled. Before my patience are exhausted.

ブルーム氏の目が新聞の縁を下って、死亡欄を見ていく。カラ、コウルマン、ディグナム、フオーセット、ラウリー、ノーマン、ピーク、ピークってどの? クロズビー・アンド・アリーの? 違う、セクストン、アープライト。印刷文字は擦れてしわしわになったところがすぐ見づらくなる。小さき花に感謝。悲しくも故人となられ。言い知れぬ悲しみにある遺族の。長の患いの享年八十八歳。一月の忌、クインラン。その魂を慈悲深きイエスの憐れみ給わんことを。

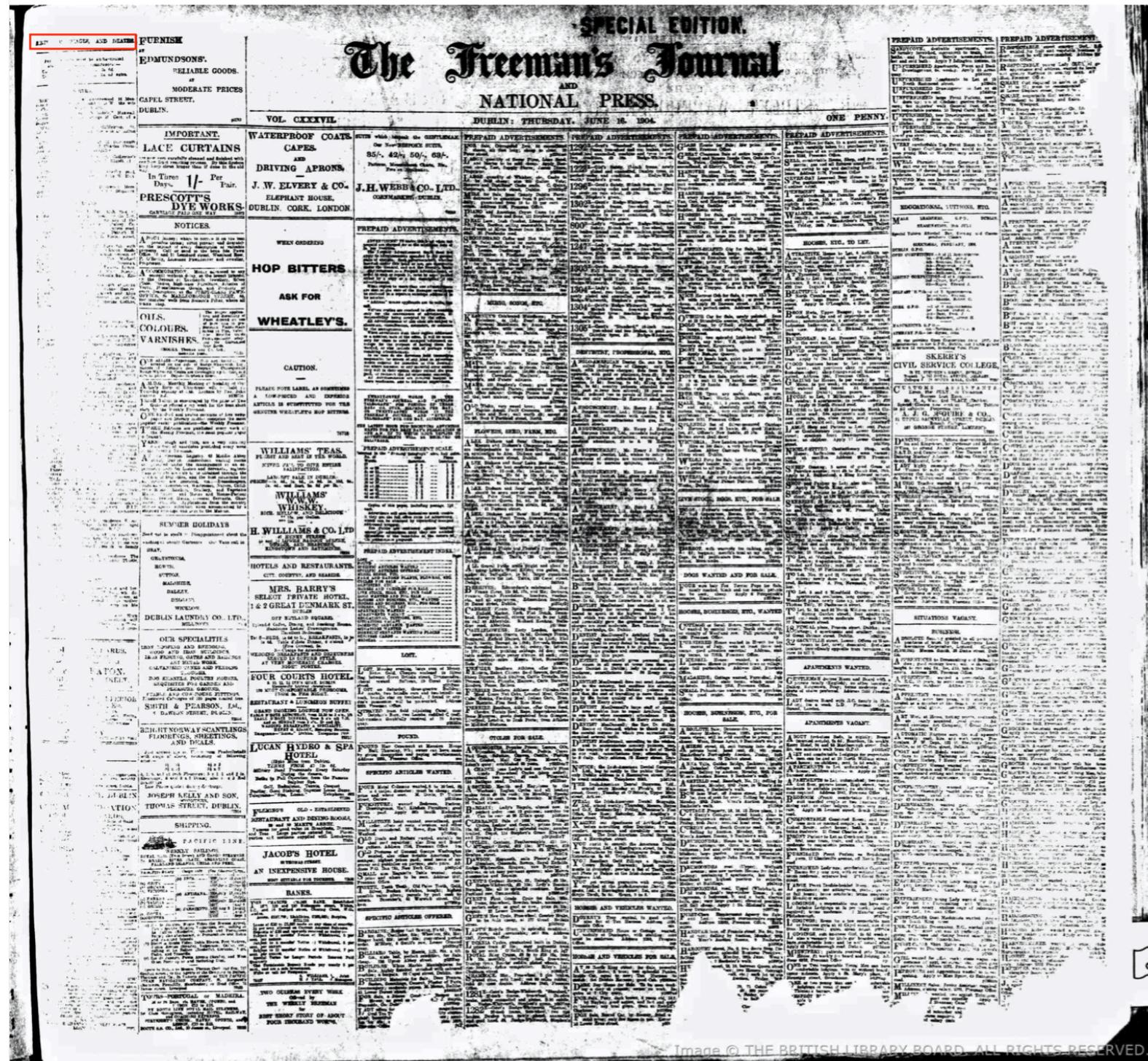
懐かしのヘンリーが逝って一月
今や住いは天に在りて
家族は嘆き悲しみつつ
いつの日か天上にての再会を思う。

封筒は破いたよな? うん。手紙はどこへしまったんだっけ読んだあと風呂へ入って? チョッキのポケットを軽く叩く。大丈夫、あるある。懐かしのヘンリーが逝ってか。私が辛抱しきれなくならないうちに。

公立小学校。ミードの材木置場。客待場。二頭しかいない。こっくりこっくりやったら腹食ったな。おつむの骨が重すぎるか。もう一頭は客をのつけてとこととことと。一時間前に通ったところだ。馭者たちが帽子を挙げる。

転換手の後ろ姿がいきなりぬっと立ち上った。ブルーム氏の窓側の電車の電柱の前。そのまま楽に転換できるような自動装置ができないものかね。でもそうならばあの男は失業か。でもそうならば別の男が新装置を作る仕事にありつけるのでは?

Freeman's Journalとインクになった人間の死—文字の生産現場と消費現場



6.157 (91:15). down the edge of the paper – The Freeman's Journal carried obituaries at the top of the left-hand column on page one. The names Bloom reads do not appear in the 16 June 1904 edition, and none seems to have any significance except momentarily Peake, who is mentioned as “hounded . . . out of the office” in “Counterparts,” *Dubliners*. (Gifford p. 107)

「ブルーム氏の目が新聞に縁を下って、死亡欄を見ていく。カラン、コウルマン、ディグナム、フォーセット、ラウリー、ノーマン、ピーク、ピックってどこの？..... 印刷文字 (Inked characters fast fading on the frayed breaking paper) は擦れてしわしわになったところがすぐ見つらくなる。」 (U-Y 6.162)

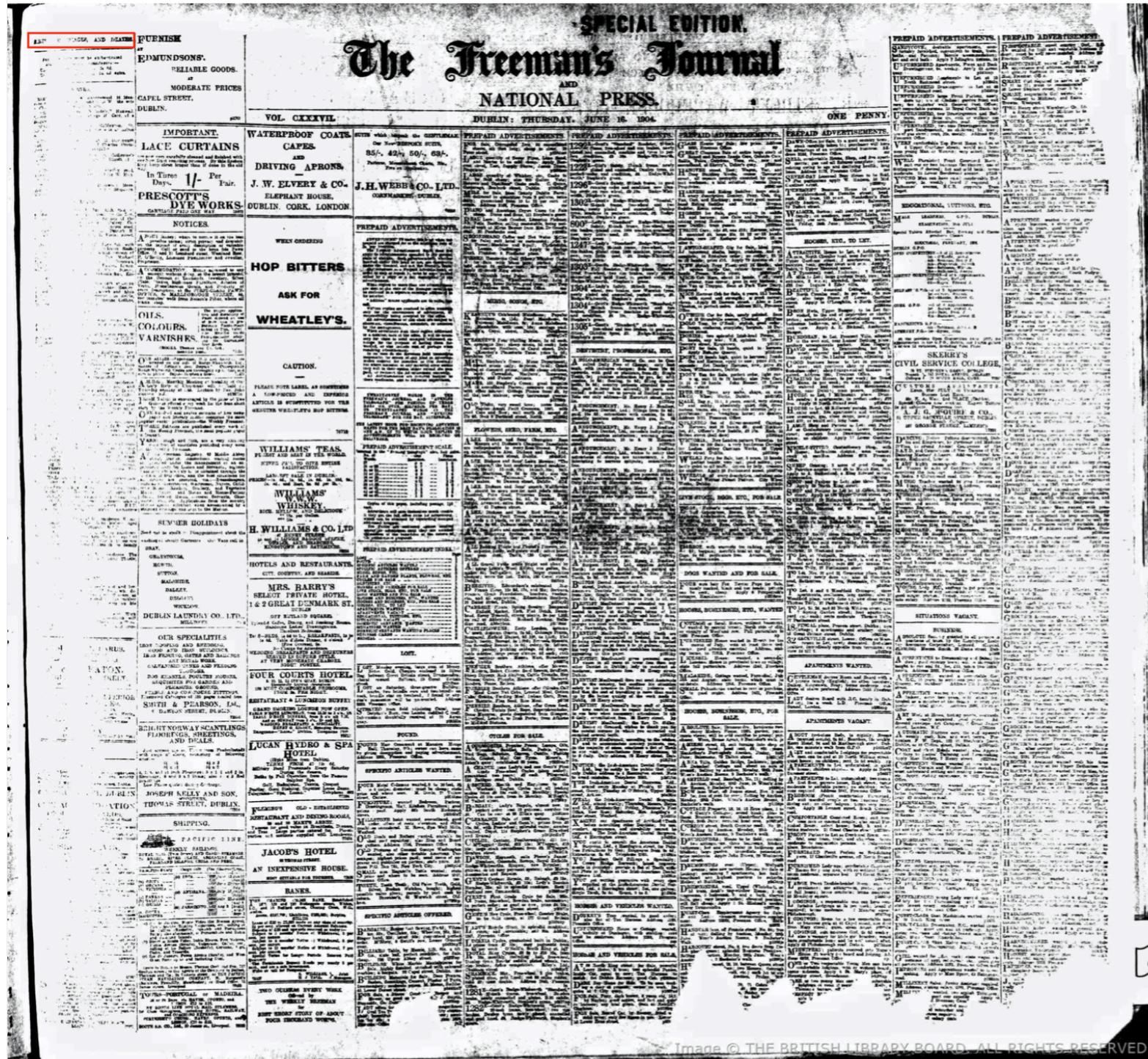
「ぼてっとインクの染みが一つ、棗椰子の実の形をして、いまつけたらしくカタツムリの寝床みたいにぬめぬめしている」 (recent and damp as a snail's bed) (U-Y 2.55)

「ケヴィン・イーガンが活版インクの染みついた指先で火葉煙草を巻きながら…」 (U-Y 3.82)

「そして手にした警棒 (バトン) の先っぽを鼻先に近づけ、印刷したてのざら紙の匂いを嗅ぐ。」 (U-Y 5.129)

第5挿話と第6挿話の繋がり

Freeman's Journalとインクになった人間の死—文字の生産現場と消費現場



6.157 (91:15). down the edge of the paper – The *Freeman's Journal* carried obituaries at the top of the left-hand column on page one. The names Bloom reads do not appear in the 16 June 1904 edition, and none seems to have any significance except momentarily Peake, who is mentioned as “hounded . . . out of the office” in “Counterparts,” *Dubliners*. (Gifford p. 107)

「ブルーム氏の目が新聞に縁を下って、死亡欄を見ていく。カラン、コウルマン、ディグナム、フォーセット、ラウリー、ノーマン、ピーク、ピックってどこの？..... 印刷文字 (Inked characters fast fading on the frayed breaking paper) は擦れてしわしわになったところがすぐ見づらくなる。」 (U-Y 6.162)

第5挿話と第6挿話の繋がり

He looked away from me. He knows. Rattle his bones.

That afternoon of the inquest. The redlabelled bottle on the table. The room in the hotel with hunting pictures. Stuffy it was. Sunlight through the slats of the Venetian blind. The coroner's sunlit ears, big and hairy. Boots giving evidence. Thought he was asleep first. Then saw like yellow streaks on his face. Had slipped down to the foot of the bed. Verdict: overdose. Death by misadventure. The letter. For my son Leopold.

No more pain. Wake no more. Nobody owns.

The carriage rattled swiftly along Blessington street. Over the stones.

—We are going the pace, I think, Martin Cunningham said.

—God grant he doesn't upset us on the road, Mr Power said.

—I hope not, Martin Cunningham said. That will be a great race tomorrow in Germany. The Gordon Bennett.

—Yes, by Jove, Mr Dedalus said. That will be worth seeing, faith.

As they turned into Berkeley street a streetorgan near the Basin sent over and after them a rollicking rattling song of the halls. Has anybody here seen Kelly? Kay ee double ell wy. Dead March from *Saul*. He's as bad as old Antonio. He left me on my ownio. Pirouette! The *Mater Misericordiae*. Eccles street. My house down there. Big place. Ward for incurables there. Very encouraging. Our Lady's Hospice for the dying. Deadhouse handy underneath. Where old Mrs Riordan died. They look terrible the women. Her feeding cup and rubbing her mouth with the spoon. Then the screen round her bed for her to die. Nice young student that was dressed that bite the bee gave me. He's gone over to the lying-in hospital they told me. From one extreme to the other.

The carriage galloped round a corner: stopped.

—What's wrong now?

A divided drove of branded cattle passed the windows, lowing, slouching by on padded hoofs, whisking their tails slowly on their clotted bony croups. Outside them and through them ran raddled sheep bleating their fear.

さつきは目をそらした。知ってるんだ。遺骨が鳴るよ、からからと。検死のあったあの昼下り。赤ラベルの瓶がテーブルに。ホテルの部屋には狩の絵が掛っていた。

むっと空気がこもっていた。ブラインドの隙間から射し込む日の光。検死官の耳に日が当って。大きな、うぶ毛の濃い耳。ポーイの証言。初めは眠ってると思ってたんだ。そしたら顔に黄色の筋みたいなのが見えた。ベッドの足もとの方へずり落ちてたね。裁断、薬物服用過多。過失死。あの手紙。わが息子、リアポウルドへ。

もはや苦痛なく。もはや目覚めることなく。身寄りはおろか知己もなし。

馬車はがたがたとブレッシングトン通りを急ぐ。石ころ道を。

飛ばし始めたようだ、と、マーティン・カニングム。

道中ひっくり返らないように頼むよ、と、パワー氏。

—そう願うね、と、マーティン・カニングム。明日のドイツの大レースじゃないんだからな。ゴードン・ベネット杯さ。

—いや、まったく、と、デッダラス氏。そいつはご免こうむりたいね。

パークリー通りへ入ると、貯水池のあたりから手回しオルガンの奏でるミュージックホールの戯れ囃し唄が追いかけてきた。誰かケリーを見かけなかった？ ケイ、イー、ダブルエル、終いがワイ。

急旋回！ 慈恵聖母病院。エックルズ通り。あつちがおれの家の方。大きな建物だ。あれが不治の患者の病棟。なんとも心強いことだね。末期の病人を引き取る聖母救護院。死体置場が手近な地

下室に。リオードンの婆さんが息を引き取ったところだ。すさまじい形相になるよ女ってのは。病人食のカップがあつてスプーンで唇をなでてやるだけ。それからベッドに衝立を回して死ぬのを待つ。あのインターンはいい若者だったなおれが蜂にやられたとき包帯を巻いてくれたっけ。産科医院に移ったそうだ。極端から極端へか。

He looked away from me. He knows. **Rattle** his bones.

That afternoon of the inquest. The redlabelled **bottle** on the **table**. The room in the hotel with hunting pictures. Stuffy it was. Sunlight through the slats of the Venetian blind. The coroner's sunlit ears, big and hairy. **Boots** giving evidence. Thought he was asleep first. Then saw like yellow streaks on his face. Had slipped down to the **foot** of the **bed**. Verdict: overdose. Death by misadventure. The letter. For my son Leopold.

Table: able.
Bed: ed.
The King's own.

No more pain. Wake no more. Nobody owns.

The carriage **rattled** swiftly along Blessington street. Over the stones.
—We are going the pace, I think, Martin Cunningham said.
—God grant he doesn't upset us on the road, Mr Power said.
—I hope not, Martin Cunningham said. That will be a great race tomorrow in Germany. The Gordon Bennett.
—Yes, by Jove, Mr Dedalus said. That will be worth seeing, faith.

As they turned into Berkeley street a streetorgan near the Basin sent over and after them a rollicking **rattling** song of the halls. Has anybody here seen Kelly? Kay ee double ell wy. Dead March from *Saul*. He's as bad as old Antonio. He left me on my ownio. Pirouette! The *Mater Misericordiae*. Eccles street. My house down there. Big place. Ward for incurables there. Very encouraging. Our Lady's Hospice for the dying. Deadhouse handy underneath. Where old Mrs Riordan died. They look terrible the women. Her feeding cup and rubbing her mouth with the spoon. Then the screen round her bed for her to die. Nice young student that was dressed that bite the bee gave me. He's gone over to the lying-in hospital they told me. From one extreme to the other.

The carriage galloped round a corner: stopped.

—What's wrong now?

A divided drove of branded **cattle** passed the windows, lowing, slouching by on **padded hoofs**, whisking their tails slowly on their clotted bony croups. Outside them and through them ran **raddled** sheep bleating their fear.

むっと空気がこもっていた。ブラインドの隙間から射し込む日の光。検死官の耳に日が当たって。大きな、うぶ毛の濃い耳。ポーイの証言。初めは眠ってると思ったんだ。そしたら顔に黄色の筋みいたのが見えた。ベッドの足もとの方へずり落ちてたね。裁断、薬物服用過多。過失死。あの手紙わが息子、リアポウルドへ。

もはや苦痛なく。もはや目覚めることなく。身寄りはおろか知己もなし。馬車はがたがたとプレシングトン通りを急ぐ。石ころ道を。

飛ばし始めたようだ、と、マーティン・カニンガム。

道中ひっくり返らないように頼むよ、と、パワー氏。

—そう願うね、と、マーティン・カニンガム。明日のドイツの大レースじゃないんだからな。ゴードン・ベネット杯さ。

—いや、まったく、と、デッダラス氏。そいつはご免こうむりたいね。

パークリー通りへ入ると、貯水池のあたりから手回しオルガンの奏でるミュージックホールの戯れ囃し唄が追いかけてきた。誰かケリーを見かけなかった？ ケイ、イー、ダブルエル、終いがワイ。サウルの葬送行進曲ならぬ。アントニオみたいな悪なんだから。あたしをおいてけぼりに。急旋回！ 慈恵聖母病院。エックルズ通り。あっちがおれの家の方。大きな建物だ。あれが不治の患者の病棟。なんとも心強いことだね。末期の病人を引き取る聖母救護院。死体置場が手近な地下室に。リオーダンの婆さんが息を引き取ったところだ。すさまじい形相になるよ女ってのは。病人食のカップがあつてスプーンで唇をなでてやるだけ。それからベッドに衝立を回して死ぬのを待つ。あのインターンはいい若者だったなおれが蜂にやられたとき包帯を巻いてくれたっけ。産科医院に移ったそうさ。極端から極端へか。

馬車がギャロップで角を曲る。止った。

—今度は何だ？

烙印の押された牛の群れが二つに分れて窓の両側を通って行く。モーモー鳴きながら、かたがたげな蹄をゴツゴツと引きずり、なにやらこびりついた骨張った尻に尾をのんびり打ち振りながら進む。群れの内外を代赭色の羊たちがおびえた鳴き声をあげながら駆ける。

第6挿話 Hades

13:00-13:30 準備：Zoomの練習・操作案内

13:30-13:40 挨拶

13:40-14:40 第1部：主催者トーク

14:40-15:00 休憩

15:00-16:00 第2部：第6挿話の「言葉の地図」作成／ディスカッション

16:00-16:10 休憩

16:10-17:10 第3部：第6挿話の「テーマパネル」作成

17:10-17:30 挨拶・次回について

17:30 ~ オンライン懇親会

次回の第7回読書会（第7挿話）は8月23日（日）に、オンラインで実施します。
予約開始日はtwitter（@YMINAMITANI）とStephens Workshopのホームページで
お知らせします。

よろしければ後ほど別途送付しますアンケートフォームにご記入いただき、
workshop.stephens@gmail.comまでご返送ください。本日はご来場いただき、
ありがとうございました。

